

RUSSIA, A MARXIST ANALYSIS

トニー・クリフ
対馬忠行訳

現代ソ連論

風媒社

トニー・クリフ 著
対馬忠行 訳

現代ソ連論 そのマルクス主義的分析

風媒社 版

目次

第一部 スターリン治下のロシア

第一章 スターリニスト・ロシアにおける社会—経済的諸関係……………3

生産の管理〔3〕労働者には利益擁護の組織は許されない〔5〕労働階級のアトム化〔7〕労働者に対する一切の法的自由の拒否〔10〕婦人労働〔12〕強制労働〔14〕消費の蓄積への従属—労働者の生産手段への従属〔17〕一方における資本と他方における貧困の蓄積〔18〕工業は戦争に従属する〔23〕労働生産性と労働者〔25〕農民の収奪〔27〕取引税〔30〕人間の財産への従属〔33〕分配諸関係の変化〔37〕官僚のミス・マネージメント〔46〕ロシア—工業的巨人〔52〕

第二章 スターリニスト・ロシアにおける国家と党……………54

労働者国家の性格に関するマルクスとエンゲルス〔54〕ロシアの軍隊〔55〕ソヴェト〔61〕選挙〔62〕党〔63〕国家と法律の死滅〔70〕

第三章 労働者国家の経済……………72

資本主義的生産関係の社会主義的生産関係への転換〔72〕分業と階級分裂〔73〕労働者と技術者〔73〕労働規律〔74〕労働者と生産手段〔74〕過渡期における分配諸関係〔75〕農民と労働者〔77〕結論〔81〕

第四章 前十月社会の物質的遺産……

83

帝政時代の物質的遺産〔86〕資本主義的生産關係の廢止のための物質的諸条件が存在しないところにおける労働階級の支配〔87〕社会主義的生産關係か？〔88〕資本家的機能〔89〕なぜ五カ年計画が官僚の支配階級への転化をあらわすか〔89〕

第五章 国家資本主義と労働者国家の共通点、相違点……

91

国家資本主義——資本主義的部分的否定〔93〕国家資本主義——社会主義への過渡〔95〕

第六章 スターリニスト社会、經濟および政治の再考察……

98

スターリニスト官僚は階級である〔98〕スターリニスト官僚——資本の最高かつ純粹な人格化〔99〕官僚の取得形態はブルジョアシーのそれとは異なる〔100〕生産諸關係と法〔101〕発展段階の両極端の綜合〔103〕經濟と政治〔104〕労働者国家から資本家国家への漸次的移行はありうるか〔106〕スターリニズム——野蠻か？〔108〕スターリニスト体制は進歩的か？〔109〕

第七章 ロシアは墮落せる労働者国家だというトロツキーの定義の検討……

112

労働者管理の下にない国家が労働者国家でありうるか〔112〕ロシアは労働者国家であるという定義とマルクス主義的国家論〔113〕生産諸關係と無關係に考察された所有形態——形而上学的抽象〔115〕アラブ封建制——国有を基礎とする階級社会の一例〔116〕ロシア官僚は分配過程にあらわれた憲兵か？〔118〕社会革命かそれとも政治革命か？〔119〕トロツキーの最後の著作〔120〕国内の諸勢力ではロシアに私的資本主義を復活させえない——ロシアの階級的性格に関する結論は何

か？〔121〕「新民主主義諸國」と労働者国家としてのロシアの定義〔123〕ロシアの諸戦勝はロシアが労働者国家であることの証拠か？〔124〕ロシア労働者国家説の放棄をトロツキーに妨げたものは何か？〔125〕

第八章 ロシア経済とマルクスの価値法則、および

資本主義恐慌論（スターリニスト体制における経済決定論）

緒言〔127〕マルクスの価値法則〔129〕資本主義的独占への価値法則の適用可能性〔132〕国家独占資本主義と価値法則〔133〕マルクスの価値法則とロシア経済——世界資本主義から切り離して考察した場合〔134〕マルクスの価値法則とロシア経済——世界資本主義との関連において考察した場合〔138〕世界的国家資本主義は存在しうるか？〔140〕マルクスの資本主義恐慌論〔141〕国家資本主義と恐慌——問題の提起〔145〕国家資本主義下の恐慌に関するプハーリン〔146〕ツガン・バラノフスキーの「解答」〔147〕破壊手段の生産と消費〔150〕

第九章 ロシアの帝国主義的膨脹……………152

日本帝国主義の例〔153〕スターリニスト官僚の膨脹の動因〔156〕帝国主義的膨脹の記録——東欧に対するロシアの搾取〔158〕ツァー帝国の理想化〔159〕民族的自由のための闘争——「チトー主義」〔161〕

第二部 スターリン死後のロシア

第十章 スターリンの遺産・危機にある社会……………167

上からの改革、下からの革命の機先を制す〔167〕スターリンの遺産・体制の一般
の危機〔169〕結語〔175〕

第十一章 ソヴィエト農業の危機は続く……………117

スターリンの遺産・農業における諸々の危機〔17〕穀物収獲の停滞〔17〕牧畜における停滞〔17〕ソヴィエト農業における労働の低生産性〔17〕停滞する農業はなぜクレムリンの主要な苦勞となつたのか？〔17〕多量のニンジン農産物に対する政府支払価格の引き上げ〔18〕処女地開発運動〔18〕トウモロコシ運動〔18〕資本投資の増加〔18〕スターリンの組織機構の若干の除去、過度に中央集権的な計画からの半歩後退〔18〕機械、トラクターステーションAMTSVの解体〔19〕農業者再編成強調の主眼はコルホーズ員に対する労働日延長の要求にあつた〔19〕コルホーズ員個人経営地における活動の狭小化〔19〕ソフホーズへの傾斜〔19〕農業危機は続く……〔20〕結語〔20〕

第十二章 工業における危機……………207

序論〔20〕遅滞する労働生産性〔20〕スターリン支配末期の工業の組織的構造〔21〕部門割拠主義〔21〕書類仕事と混乱〔21〕価格機構の動き方と工業経営〔21〕経営効率を判断する粗悪なモノサシ〔21〕高い目標と低い供給の間〔22〕諸優先と個人びいき〔22〕専断対合理性〔22〕諸管理制度は経営者と黙約を結んでいる〔22〕なぜロシア工業には合理性が欠如しているのか？〔22〕工業行政における一九五七年のフルシチョフの諸改革〔23〕後退の六カ年〔23〕結語〔24〕

第十三章 ソヴィエト・ブロックの経済的統合の失敗……………242

貿易による衛星諸国からの搾取は依然続いている〔24〕東欧経済統合における功の欠如〔24〕なぜ国際的分業に対する実によく多くの障害に国家資本主義は出会っ

ているのか?〔242〕

第十四章 労働戦線における危機

序論〔249〕公然たる強制からの後退〔249〕強制労働の放棄〔251〕勤労者に対する法的諸制限の緩和〔252〕ニンジンは多量に〔254〕生産財対消費財〔254〕住宅——もはやシンデレラはいないのか?〔256〕労働時間の長さと同量〔258〕年金〔258〕最低賃金の引き上げ〔259〕ニンジンは必ずしも多量ではない〔259〕不平等と社会的移動性の緩慢が労働刺激に及ぼす影響〔261〕教育のはしご〔263〕労働者は「社会主義的競争」をサボタージュする〔265〕賃金制度の一九五六年以後の改革〔270〕労働配置転換〔272〕労働者による盗み〔272〕変わりゆく労働階級〔273〕

第十五章 自由化、テロの緩和

法律改正〔275〕同志裁判所と市民集会〔277〕秘密警察の格下げ〔279〕テロ減少の諸原因〔280〕「無血粛清」は続く〔283〕国家の消滅〔284〕党は依然として官僚のクラブである〔285〕選挙はいまだにペテンだ〔286〕

第十六章 民族抑圧政策の緩和

スターリンの民族政策の行き過ぎの若干の矯正〔289〕モスクワからの行政的統制は続く〔290〕帝政時代の併合の理想化は未だ続いている……〔290〕ロシア化はなお続く……〔292〕チトー主義との闘いは続く……〔292〕

第十七章 モスクワと国際共産主義運動

スターリンの形見〔294〕モスクワと北京の分裂〔295〕モスクワ・北京分裂の世界共産主義運動に及ぼす諸影響〔298〕結語〔298〕

第十八章 きたるべきロシア革命……………300

スターリニスト・エボックを云々するのは誤っている〔300〕プロレタリアートと官僚制との力関係に及ぼす工業化と「集団化」の最初の直接的影響〔301〕全体主義的警察機関の抑圧〔302〕ロシアの軍事的勝利〔302〕官僚制は自己の墓掘人を創出している〔303〕スターリン主義的宣伝効果の減退〔304〕反スターリン主義的反对派の社会的目標〔304〕大演習——ハンガリア革命〔305〕結語〔307〕

あとがき……………309

引用文献表……………卷末

- 第一部 スターリン治下のロシア
第二部 スターリン死後のロシア

第一部
スターリン治下のロシア

第一章 スターリニスト・ロシアに

おける社会Ⅱ経済的諸關係

ロシアにゆきわたっている経済的、社会的諸關係の顕著な諸側面のいくつかを描写することから、スターリニスト・レジームの性格に関する研究をはじめることによろう。事実にもついた検討は、のちに試みる分析と綜合に対する基礎として役立つであらう。本章においては、ロシアにおける体制の次のような諸側面が取り扱われるであらう。

- 1 生産の管理。
- 2 労働者には利益擁護の組織は許されない。
- 3 労働階級のアトム化。
- 4 労働者にたいする一切の法的自由の拒否。
- 5 婦人労働。
- 6 強制労働。
- 7 消費の蓄積への従属——労働者の生産手段への従属。
- 8 一方における資本と他方における貧困の蓄積。
- 9 工業の戦争への従属。

- 10 労働生産性と労働者。
- 11 農民の収奪。
- 12 取引税。
- 13 人間の財産への従属。
- 14 分配諸關係における変化。
- 15 官僚のミス・マネージメント。
- 16 ロシア——工業的巨人。

生産の管理〔1〕

革命の直後、すべての工場の管理は労働組合の手に任されること
が決定された。かくて、第八回党大会（一九一九年三月一八—二三
日）で採択されたロシア共産党の綱領は次のように宣言した。

「社会化された工業の組織的機構は、まず第一に労働を基礎と
せねばならない。労働組合は……それぞれの生産部門における労働者
の大多数を包含し、やがてはそのすべてを包含する大産業別
組合とならねばならない。

労働組合は、ソヴィエト共和国の法律の条文によっても、またす
でに根をおろした慣習によっても、今日既に中央地方を通じて一
切の産業管理機関に参加しているが、経済的単一体としての全国
民経済に対する全般的管理を、事実においてその手に集中するま
でにならなければならぬ。このようにして労働組合は、中央の国
家行政機関と、国民経済とそして広汎な勤労大衆との間に、切り
はなしえない紐帯をたもつことによつて、経済の運営の直接的仕
事に勤労大衆を広汎に参加させねばならぬ。経済の運営に労働組

制作中

訳者 対馬 忠行

1901年11月、香川県に生まる。大正末年頃、福本イズムを通じてアナキズムよりマルクシズムにいたる。32年テーゼ時代に日共系を離れたが、もっぱら独学でマルクス学を専攻す。

著書—「日本資本主義論争史論」「日本におけるマルクス主義」「マルクス主義とスターリン主義」「国家資本主義と革命」「トロツキズム」トロツキー選集(12巻)の編纂、その他。

現代ソ連論

1968年5月25日 第1刷発行

¥ 1400

著者 トニー・クリフ

訳者 対馬 忠行

発行所 風 媒 社

名古屋市中区不二見町7-1 久野ビル
振替・名古屋5616 電話 052 5473

* 香 風 印 刷 * 鈴 本 製 本